

森永太一郎と江崎利一

二大お菓子メーカーの創始者は佐賀県から



佐賀県出身の森永太一郎と江崎利一は、今も愛され続けている二大お菓子メーカーの創始者です。

発売当初の

森永ミルクキャラメル(1913年)

ミルクキャラメル バラ売り880個入 (森永製菓株式会社提供)
10斤(4,500g)缶
(1斤 60粒入/40銭)



森永ポケットキャラメル

印刷小缶(1908年)
(10粒入/10銭)

ポケット用

紙サック入りミルクキャラメル(1914年)

缶入りだったキャラメルは「もっと安価で携帯できる容器を」という考えからこの形になりました。今の定番のパッケージは、社員のアイデアで生まれました。(20粒入/10銭)

日本に西洋菓子を広めた、菓子王・森永太一郎

もりながたいちろう
森永太一郎は、1865(慶応元)年、現在の佐賀県伊万里市に生まれました。6歳のときに父を亡くし、幼少期は親族の家を転々としたのち、陶器商となりました。24歳のとき、陶器の販売をするために渡米しますが、失敗に終わります。借金を抱えた森永は、そ

調べてみよう?

佐賀ではどんなお菓子があったのだろう?



発売当初のグリコ(1922年)

グリコキャラメルの形状は一時角形でしたが、今は当初の立体的なハート形をしています。



(森永製菓株式会社提供)

森永 太一郎

1865(慶応元)年~1937(昭和12)年



(江崎グリコ株式会社提供)

江崎 利一

1882(明治15)年~1980(昭和55)年

のままアメリカに滞在し、職探しをしましたが、人種差別により就職も難しいなかで、親切なキリスト教徒の老夫婦と出会い、洗礼を受けました。

その後、2度目の渡米で人生の転機となるキャラメルというお菓子に出会いました。森永は、「おいしくて栄養価の高いキャラメルを日本の子どもたちに食べさせたい」と思い、西洋菓子職人を目指したのです。



(森永製菓株式会社提供)

赤坂田町時代に小売店に配布した額縁入りポスター

明治36(1903)年2月に赤坂田町に店舗を移転しました。このころ小売店に配布したポスターです。商品名が書かれています。

COLUMN

戦前の4大菓子メーカー

第2次世界大戦前の日本における「4大菓子メーカー」といわれるのが、森永製菓、明治製菓、江崎商店(江崎グリコ)、そして明治30年代、台湾で創業された新高製菓です(当時、台湾は日本の統治下にありました)。明治製菓を除く3つの菓子メーカーの創業者は、全て佐賀県出身。新高製菓は今はありませんが、ドロップやチューインガムの製造販売で知られていました。

ベーカリーで技術を学び、その後、キャンディー工場に就職し、西洋菓子の製造技術を学びました。このとき彼はすでに35歳、挫折を経ての再起でした。

1899(明治32)年6月に帰国し、同年8月に現在の東京都港区虎ノ門付近に「**森永西洋菓子製造所**」を開きました。まだ和菓子が主流だった時代に西洋菓子を日本に広めるため、森永は東京の一流の菓子店を訪ね歩きましたが、初めて注文を受けたのは、開業から2か月後のことでした。

創業からの数年間は、マシマロ(マシュマロ)やチョコレートクリームキャンデー類は評判になりましたが、キャラメルだけはバターやミルクの味になじみのない日本人にはなかなか受け入れられませ

んでした。風味を改良したり、また保存性をよくするため、製造方法を見直し、バラ売りだったキャラメルを一粒ずつ包装用の紙に包み込むなど、品質改良に工夫を重ねる日々が続きました。

そして、徐々に乳製品が愛好されるようになると、1914(大正3)年に開催された東京大正博覧会で、土産用として、携帯に便利なポケット用、紙サック入りのミルクキャラメルを発売しました。それが大ヒットとなり、そののち、「キャラメルと言えば森永」と言われるほど有名になったのです。

創意工夫をこらし続けた江崎利一

江崎利一は、1882(明治15)年、現在の佐賀市蓮池町に生まれました。高等小学校卒業後は、家業の菓屋を手伝い、弟妹の子守りをしながら、商売を学びました。

江崎は、1919(大正8)年、37歳のとき、**グリコーゲン**との運命的な出会いをしました。菓売りに出かけていたとき、早津江川の土手で漁師たちが大鍋でカキをゆで、そのゆで汁を捨てている様子を見かけ、江崎はかつて読んだ菓業新聞の記事を思い出しました。その記事の内容は、「体に良いグリコーゲンは、日本の貝類、特にカキに多く含まれている」という内務省栄養研究所長の発表によるものでした。

「カキの煮汁にもグリコーゲンが含まれているかもしれない」と考えた江崎は、それを分けてもらい九州大学で分析してもらいました。

江崎は、育ち盛りの子どもたちに喜んで食べてもらえるよう、グリ

森永のエンゼルマークは、マシュマロに由来します。アメリカではマシュマロのことを「エンゼルフード」と呼んでいたために、天使の絵と森永のMの字を使ってマークとしました。また、太一郎がクリスチャンであったことから、神の使いである天使を使うことは、神を崇めることに通じると考えたそうです。

マシュマロから生まれたエンゼルマーク



最初のエンゼルマーク

現在

(森永製菓株式会社提供)

(森永製菓株式会社提供)

江崎グリコのゴールインのマークは、八坂神社(佐賀市)の境内でかけこしている近所の子どもたちの姿からヒントを得ました。両手を大きく上にあげてゴールインする姿を見て、「スポーツこそ健康への近道、子どもの遊びもまたスポーツにつながっている」と考えたのです。

健康を願ったゴールインマーク



創業時のゴールインマーク

現在

(江崎グリコ株式会社提供)

(江崎グリコ株式会社提供)



(江崎グリコ株式会社提供)

初期のグリコいろいろ

1922(大正11)年の創業当時から1939(昭和14)年ごろまでのグリコ。創業当時は缶入りもありました。おもちゃが付き始めたのは1927(昭和2)年からです。

コーゲンを当時人気のあったキャラメルに入れて成功を取めることになります。

江崎は、他社との違いを印象づけるため、商品の名称や形、デザイン、キャッチコピー、広告に至るまで考え抜き、商売の都、大阪で勝負しました。まず、伝統と歴史ある百貨店に売り込みました。最初は断られたものの、熱心に足を運び続けたことで相手が根負けしてしまいました。有名な百貨店に置いてもらったことで、他の店にも並べてもらえるようになりました。

そして、映画付自動販売機など



映画が見られる自動販売機

(江崎グリコ株式会社提供)

1931(昭和6)年に設置されました。10銭硬貨を入れると、グリコと2銭のお釣りがもらえるだけでなく、映画が数10秒見られる画期的な自動販売機でした。利益よりも話題を集めるために作られました。

COLUMN

日本初や珍しい広告

創意工夫の江崎グリコ。映画付自動販売機や大阪道頓堀のネオン塔をはじめ、今こそ当たり前ですが、レコード会社とタイアップしてイメージソングを作ってCM放映するのを始めたのも江崎グリコです。一方、お菓子業界で新聞広告を最初に打ち出したのは森永製菓です。

当時では珍しい広告方法を次々に打ち出していました。

常に「創意工夫」を掲げていた江崎。そのアイデアやチャレンジ精神が今日の大企業の礎を築いてきたのです。

学校の取組

【地域連携プロジェクト】

佐賀県立佐賀農業高等学校
食品科学科

佐賀農業高校では、高校生ケーキカフェや販売所の運営を行い、地域との連携を図っています。



調べて書いてみよう!

どんなお菓子が、どんな思いで作られたのか、どんな宣伝がされたのか調べて書いてみましょう。



読んでみよう!

『森永太一郎青春伝』

集英社刊

『商道ひとすじの記-わがグリコ・わが人生九十余年』

日本実業出版社刊



出かけてみよう!



八坂神社 (佐賀市蓮池町蓮池 217)

八坂神社の近くに江崎利一の生家跡(現在は公民館)があり、その前には記念碑が建てられています

(佐賀市教育委員会提供)



森永公園 (伊万里市大坪町乙3-1)

森永製菓の乳製品工場跡地にある公園です。森永は出身地である伊万里市に工場を造ることで地域に貢献したといわれ、森永の胸像も立っています。

(伊万里市観光課提供)

検索してみよう!

森永の歴史

江崎記念館

